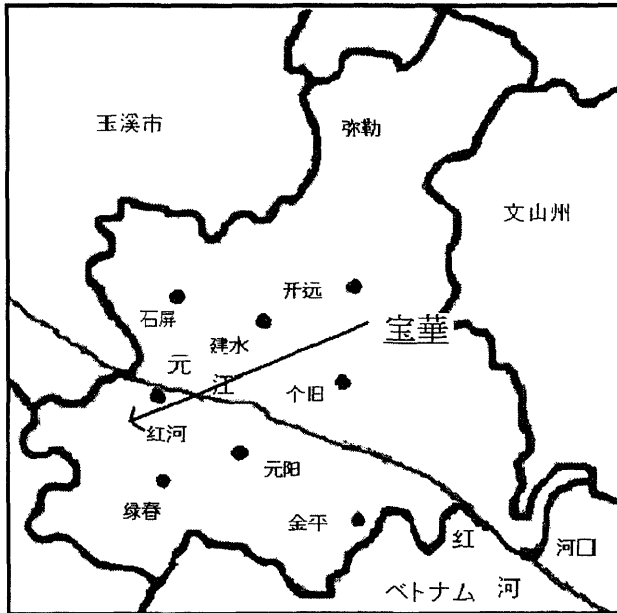


## 中国雲南省紅河県宝華郷座洛村におけるイ族の村神祭祀

楊六金\*

紅河県宝華郷座洛村のイ族は「ネス」ne<sup>33</sup> su<sup>55</sup>を自称している訳注1。イ族のネス支系は主に雲南省の紅河県、緑春県、元陽県、金平県、蒙自県、開遠県、箇旧県、建水県、石屏県、玉溪市、新平県、元江県、峨山県、通海県、江川県、易門県、墨江県、江城県、双柏県など20あまりの県、市に分布し、人口は全部で200万人を超える。



長い社会発展の過程において、様々な歴史的原因により、ネスの人々の居住域は分散しており、各地の政治、経済、文化の発展は一様ではない。風俗習慣についても差異があり、「百里離れば『風』が異なり、千里離れば『俗』が異なる」という具合に、同一民族においても風俗習慣には差異が生じている。イ族のネス支系の村神祭祀は、当地のイ語ではミガハmi<sup>55</sup> ka<sup>21</sup> ha<sup>21</sup>と称している。イ族のネス人の地域では最も代表的な伝統的な祭祀習俗である。ここでは雲南省宝華郷座洛村のイ族ネス支系の村神祭祀の状況を以下に述べる。

※雲南社会科学院紅河民族研究所副所長（副教授）

訳注1 「ネス」は漢字では「尼蘇」を当てており、これまで筆者も含めて「ニス」と翻訳してきた [e.g. 楊1994]。国際音標からするとかな書きではネスが妥当であり、今後ネスに改めたい。楊六金 1994「雲南彝族ニス人の婚姻習俗」『比較民俗研究』9号筑波大学比較民俗研究会pp.198-203（稲村務訳）

## I 村神祭祀の日取りと司祭の選出

### 1. 村神祭祀の日取り

毎年旧暦1月の最初の丑の日に行う。

### 2. 司祭の選出 ミガゾテポ $mi^{55}ka_{21}dzo_{21}t\epsilon^{55}pho_{21}$

司祭は村神祭祀を執り行う者である。司祭（ゾテポ  $dzo_{21}t\epsilon^{55}pho_{21}$ ）は、一般に村の中で人望が厚く、行いが品行方正で、妻が健在であり、穏当に事を運ぶ性格であるなどの条件を満たした男性の長老が務める。彼が望むのであれば、家の中で何かの事故がない限り、再任も世襲も認められている。2000年の座洛村の村神祭祀では、司祭は主儀礼の始まる三日前から活動を始め、石灰水を体にかけ身を清め、またその石灰水を飲むことで内臓を清めることを表し、婚礼や葬儀に行くことを忌まれた。

副司祭  $dzo_{21}t\epsilon^{55}pho_{21}le_{21}tse_{21}$  は司祭の最も信頼する助手であり、再任しても随意に辞めてもよい。祭祀の内容を十分に把握していればよく、司祭が任命してもよいが、妻の妊娠期、産褥期、近く家人が病気で亡くなった人は担当することができない。副司祭の主な仕事は主祭壇を清めること、香を焚くこと、供物の受け渡し、司祭の横でしゃがんで随時指示を仰ぐこと、具体的な各種の供物を準備することなどである。司祭に次に何を祀り、何をするのかを提言してもよいけれども、祭祀自体を執り行うことはできない。祭祀が終わるのを待って、司祭が供物を片付け、そのすべての供物を各世帯に均分に分配するのを手伝うのも副司祭の務めである。

### 3. 助手 $le_{21}pe_{21}$

助手は村の長老たちによって新しく建てられた世帯の家長の中から選ばれる。これは村の長老による、新世帯への承認、信頼および庇護を表している。ただし、妻の妊娠期、産褥期、近く家人が病気で亡くなった人は担当することができない。一般に、四人ないし八人を一組とし、主な仕事は祭壇と礼拝台を清めること、祭祀の費用を集めること、生贄、御香、白酒、茶、ヨシの茎、煮炊きの道具と箸碗などの供物の準備であり、その準備には鍋を設えて火を起こすこと、生贄を殺すこと、供物の分配や祭りの秩序を保つことなども含まれる。

イ族のネス人においては、野外で神を祀ったり悪霊を払ったりするような祭祀には、一律に女性は参加できず、女性には多くの不浄があると考えられている。

## II 祭祀の過程

### 1. 井戸神への祭祀 $zi_{21}du_{21}lo^{33}s\epsilon_{21}pho_{21}$

村神祭祀の朝、司祭、副司祭、助手および数名の村の長老は、それぞれ雌雄一対のニワトリ（白いニワトリは用いてはならない）と二つの鶏卵もしくはアヒルの卵、茶、塩、酒、米などを自分の村の井戸の傍らに持って行き、井戸神に捧げ、井戸  $zi_{21}du_{21}$  を清める。イ語では、これをイドウダイといい、井戸神を祀るという意味である。祭祀の時には、井戸の右側に柳あるい

は松の枝で簡単に作られた「ちゃぶ台」を置き、その上に松の葉を置いて井戸神への祭壇とする。その後、ニワトリを殺して、井戸の神に捧げ、井戸が一年清く保たれ、水が絶えないことを祈る。

## 2. 家屋を清めることと卵を染めること

井戸を清める祭祀と同時に、家では主婦と他の女性成員により、メプ<sup>me<sup>21</sup> pu<sup>33</sup></sup>（一種の樹木の枝）で、煙や塵を払って家屋を清め、炊事具などを洗い清める。紅草の根と一緒に鶏卵を煮て、赤くする。それをシュロ（棕櫚）の葉で編んだ籠に入れ、祖先に捧げる。染められた鶏卵は親戚や近所で互いに贈り合う。ただし、卵の数は祖先に捧げるものはもちろん、贈答であっても偶数でなくてはならず、奇数は禁じられており、ましてや一つではいけない。その後、男の子に色付き卵を背負わせ、村神の林に行って村神にそれを捧げた後はその卵を食べてよい。女の子については二日目になってからはそれを食べてよい。成人は卵を食べてはいけない。それゆえ、この日を「子供の日」という者もいる。

これらと同時期に、各家では湯圓（白玉の入った甘い汁）を祖先に捧げる。湯圓を作る時は必ず三碗でなくてはならず、それぞれの碗に白玉を36個入れる。湯圓が出来上がったら、一つの碗を天神に、一つの碗を祖先に、もう一つの碗を家神に捧げる。

## 3. 村神を祀る

湯圓を食べ終わると、各家の家長は親指大の塩の固まりとニンニク一個、三本の線香、を載せた一碗のもち米を持って、一家の男子全員を連れて村の草地あるいは村の「公房」<sup>訳注2</sup>に行く。村の全戸の男子が揃った後、司祭は全村の男子を引き連れて、村神の林に行く。村神の祭りは一般に村の上の方の林を選んで行われる。村神祭祀に参加する男子は村神の林に着くと、掃除を始め、祭壇を清める。特に、村神を象徴する石柱には、清らかな水で上から下へ36回、下から上へと36回洗う。その後、手伝いの者たちは鍋に水を張り温める。手伝いたちは、真っ黒な黒豚と赤い雄鶏、青い線香を36本、栗の樹の葉で作った36個の碗などの供物を用意する。まず石柱の前に線香を立て、木の葉の「碗」を捧げ、ニワトリを石柱の横に置き、ブタは石柱の横の一本の木に繋いでおく。捧げ物が終わって、祭祀が始まる。まず、ブタとニワトリの毛をつまんで、石柱の前に置き、供物を村神に捧げたことを示す。続けて、手伝いたちはひしゃく二杯の清らかな水をブタとニワトリにかけ、象徴的にそれらの全身を洗ったことを示し、上から下へ36回、下から上に36回洗わなければならない。洗い終わると、手伝いたちはブタとニワトリを殺し、毛

---

訳注2 中国語では「公房」と訳されており、日本語ではしばしば「若者宿」と訳される建物であるが、昼間は老人たちの憩いの場であり、夜は若者たちが歌ったり踊ったりする場となる。こうした村落儀礼でもしばしば用いられる場でもある。現在は目にすることは難しくなっている。

をそぎ落として洗う。洗われて内臓を出されたブタを祭壇の石のテーブルの上に置き、羽毛と内臓を除去されたニワトリを石柱の上に置く。司祭は石柱の前に跪き、頭を下げながら次のように念じる。「……黒豚をあなたに献上いたします。大きな雄鶏をあなたに献上いたします。この一年風雨が穏やかで、作物が豊作で家畜や人が健康であります様に。村の老若男女が全員健康でありますように。村から出て行った男たちを守り、財をなし、食べるもの着るものに不自由がありませんように……」。続いて、全村の男子は石柱に跪き、村神からの庇護を祈る。

以上のような祭祀が終わってから、茶、生肉、白酒、煮た肉、米飯、もち米のおこわなどを捧げる。こうした供物はどれも、36に分け、36の碗に入れて捧げられる。もしも、36碗に分けた後、占いの結果を人々が不満に思うのであれば、72に分け、72碗に入れ、更に不満な時は108に分け、108碗……というように人々が占いの結果を満足するまで分ける。しかし、こうした捧げ物は同じものを分割するのではなく、違ったものを捧げなければならない。例えば、茶、白酒、米飯、おこわを捧げる時は、人々が占いに満足するかどうかに関わらず、その捧げ物の数量だけを増やし、その種類は増やしてはならない。けれども、煮た肉や生肉を捧げる時は、もし人々が占いの結果に不満なら、捧げ物の数量だけでなく、その種類も増やさなくてはならず、供物となった動物の各部位を一つずつ捧げることになる。もしも、その中の部位の一つを万一捧げ忘れてしまい、占いの結果に不満であるということがあれば、その部位の肉を補充したうえで、祭祀の回数あるいは碗の数を増やさなくてはならない。これによって、「その前に忘れてしまった肉をただいま補充しました。不思議に思わないでください。」ということを村神に示し、村神に人々の一時の粗忽さについて許しを請うのである。

祭祀が終わると人々は順に地面に跪き、頭を下げて村神の加護を祈るのである。

#### 4. 「虎」「豹」を追い出す $z_i du_{21} lo_{21} te_{21} th_{21}$

すべての捧げ物が終わると、続いて「虎や豹を追い出す」という祭祀を行う。祭祀に入る前に、司祭は二人の「虎」「豹」を担当する若くて力のある男子を選ぶ。選定の際は、妻が妊娠している者、子供が生後百日に満たない者、妻が亡くなって三年未満の者、離婚後一年未満の者は選んではならない。「虎」「豹」を選んだ後、彼らは仮装し、一人（「虎」役）はよく炙った五寸大の三つの肉の塊を持ち、もう一人（「豹」役）は一碗のおこわを持つ。「虎豹」は外から内側へ向かって段々小さく祭壇を中心に円を描きながら反時計回りに三周する。祭壇につくと今度は時計回りに段々円を大きくしながら時計回りに内から外へと三周する。彼が回りながら逃げていく時、祭祀に参加したすべての人々は、彼らに火のついた棒切れ、土の塊、草を丸めたものを、ウォーフ、ウォーフと掛け声をかけながら次々に投げつける。この時、「虎豹」が命からがら林の外に逃げ、村神の林の区域から出たところでモノを投げるのをやめる。追っていった人たちが帰ってくるのを待って、彼らが持ってきた肉とおこわを分け合って食す。もしも追いつくことができなかった時は、彼らは自分で持ってきた肉やおこわを食べてしまうことはできない。必ず村神の区域へ持ち帰って食べなければならない。

## 5. 捧げ物を分配する

捧げ物は多少に関わらず、小さな一片でさえも各世帯で均等に分配する。もしも、「人が多すぎて分け前が少ない」ということがわかっており、実際的に捧げ物が分けられない場合でも、細かく切り刻んで粥や肉のスープにして各世帯で均等に分ける。

## 6. 米あられを祖先に捧げる

捧げ物を均等に分配した後、司祭は村神に代わって、祭壇正面の高いところに立ち、もち米を揚げて作った米あられを一握りずつ、頭を下げて祈っている人々に向かって撒く。そして「『福』(ゼロdze<sub>21</sub> lo<sub>21</sub>)が降りてきて、君たちの手に入りますように」と念じる。この時すべての頭を下げて祈っている人々は自分の服の襟元を開けて、「『福』を受けた。『福』を受けた。」といい、不断に頭を下げながら村神に感謝し、米あられを持ち帰る。

各家、各世帯では予め持ってきた米に、火の付けられた三本の線香と包まれた米あられそれと三本の葦を供え、オレオレγo<sup>21</sup>le<sup>33</sup>（「手に入った」の意）と不断に叫ぶ。家の方に向かいながら、自分の家まで叫んでいく。家に着いた後、葦を一本囲炉裏の上に挿し、もう一本を家の中心の柱に挿し、もう一本を稲積みの上に挿す。それから用意した碗の米を米櫃に入れ、米あられを稲積みの上に撒く。供物になったものはしばらく供え台か神棚に置いておく。続いてこれらの供物は煮た後、祖先やその他の諸神に捧げられる。そうして、一家全員で頭を下げ共に食す。

## 7. 村門の祭祀

二日目の昼、司祭は全世帯の家長あるいは男子を連れて、ラタタla<sup>55</sup>tha<sup>33</sup>tha<sup>33</sup>（新しい村門を建てる祭祀）を行う。供物は雄犬一匹、白い鶏一羽、鶏卵二つ、アヒルの卵二つ、無精の鶏卵二つ、無精のアヒルの卵二つである。ラタタは一般に村の西側あるいは未成年や異常死した者の葬られている墓地の方向から離れたところで行われる。人々はラタタに来て、犠牲となる鶏や犬を殺し、卵を細かく砕き、無精卵か腐った卵を深く土に埋め、犬の頭、爪、鶏の頭、爪、翼などを割り開き、それらを草とつる草でつくっておいた縄につける。村にはいくつか入り口があり、こうした特殊な縄が張られており、こうした特殊な縄には鋸の歯の形にした筍の皮10枚がつけられ、若干の呪符と柳の木で作った二つの弓矢などが付けられている。各入り口の門の横木を換えるとき、この特殊な縄をそれぞれの入り口にわたす。それからは妖魔悪鬼や伝染病やその他疾病、穢れた言葉や邪悪なもの、猛獣などが村にはいることから村を守ってくれる。それら邪悪なものが村に自由に入って祟ったり、かき乱したりすることをできなくするのである。鶏と犬の肉が煮えてからそれを村門の神に捧げ、村門の神にこれらの邪悪なものや猛獣たちが簡単に入らないようにするよう祈るのである。煮た鶏や犬の肉は象徴的に参加者各人に分配される。食べなければ村の外に捨てても構わないが、他人に食べさせてはならず、また村の中に捨てることも家に持ち帰ることも固く禁じられている。

ここで言うておきたいのは、かつイ族のネス人の村で村門を建てる時は、まず簡単な門を立て、大多数は丸太を使って建てていたということである。毎年一度ラタタのときにその門の朽ちたり壊れたりした部分を取替え、修理していた。修理が終わってから犬や鶏を殺して村門の神に捧げていた。現在の多くの村々では元々の門は見あたらないが、このラタタの祭りの度に新しく門を建てることと門の神に捧げ物をする事だけは変わらずに今に至っている。

### Ⅲ 祭祀の目的と意義

村神の祭祀の目的と意義はおおよそ以下のとおりである。

#### 1. 人や家畜の健康と作物の豊穰を祈る

村神祭祀の最大の祈願は神霊の加護を得ることである。人々の伝統的な観念では、すべての神霊は生存を維持するのに必要であり、またそのエネルギーを受けないといけない。その主要な一つの方法が人による祭祀なのである。つまり、種々の犠牲を捧げることというのは、神霊を満足させ人への災いを免れようとするのが目的なのである。

イ族のネス人の村建ての伝統では、村落は一般に山に沿うようにして造り、上に村の上部、下に村の下部がくるようにし、同時に左右（村の下から見て左右）と村の上下に村の入り口を作り、そこには村門がある。村神の樹林は一般に村の上部にあり、平時は人が入ることを禁じており、ましてや家畜などが入ってはならない。村の上部を選ぶ意義は、高所から村全体の動静を俯瞰できるようにし、村の変化、村人の安泰と健康を守るということにある。

#### 2. 「虎」「豹」を追い出す

「虎」「豹」を追い出すということは、作物を荒らしたり人間に危害を加える一切の動物を追い出すということであり、人々の生存と繁栄を求めること、すなわち作物の豊穰、家畜と人の健康を祈ることを目的として行われるものである。

#### 3. 人と精霊の境界線を分ける

イ族のネス人の伝統的な考え方では、世界は二つの部分に分けられ、ひとつは精霊が固定しているか外をうろうろと動き回っているところであり、もう一つは人が狭い村落の中で生存・発展しているところである。村神祭祀によって新しい村門を建てるラタタによって人と精霊が厳格に分けられ、その境界線が引かれる。新しい村門を建てる祭祀の主要な捧げ物は、家で飼っている一匹の犬である。イ族のネス人の見方によると、犬は家を守る家畜であり、見知らぬ人の侵入を監視、あるいは防止し、人にその合図を送る。夜も精霊を見ることができ、新しく村門を建てる時や村門を修理する時には、一匹の犬を献じ、その頭と爪を新しい村門の横木あるいは縄の上に掛け、昼夜を問わず村門を守らせ、いろいろな精霊や疫病、疾病が村に入って人畜に危害を加えないようにする。同様に、白い雄鶏についても、イ族のネス人の伝統的な考え方では、雄鶏が鳴くと、昼夜を問わず精霊は逃げて行き、村門はこうして精霊が自由に村に

入って人畜に危害を与えないように守っているのである。

#### IV 禁忌

座落村のイ族ネス人の日常生活の禁忌については、村神祭祀の活動の形式で集中的に表現されており、それには農作業、日常生活など精霊に対する様々な禁忌がある。

##### 1. 神霊に対する禁忌

###### ①村神アロ (a<sub>21</sub> lo<sup>33</sup>) に対する禁忌

村神を象徴する樹林は竹垣で囲まれており、村によっては現在石や日干し煉瓦で作った垣を付けたり、木の門あるいは鉄の門を付けているところもある。それらの門は祭祀のときだけ開放され、普段は人の出入りは厳しく禁じられており、その中に家畜を入れたり、中に入って薪をとったり木を切ったりすることは以っての外である。祭祀のときは頭を下げたてて祈り、また姿勢に気を配り、ターバンを付け、膝と両手を地に付けて三回頭を下げ、起きる時には手のひらを内向きにして起きなければならない。これにはその神霊に加護を求めるという意味がある。

###### ②祭壇に対する禁忌

司祭を除いて、誰であっても祭壇の中心に入ってはならない。そうでないと、禁を犯した者から、村の長老たちや司祭によって厳重に罰せられ、それぞれ一羽の大きな雄鶏、一斤(500グラム)の白酒、一碗の米飯を以って、司祭一同、神林に対して頭を下げたてて贖罪を求めなくてはならない。

###### ③村神の林に対する禁忌

祭祀に参加するすべての者は、神林のなかでは騒いだり、笑ったりしてはいけない。また、そこで大小便をしたり、下品な話をしたりしてはいけない。そうでないと、長老たちに厳しく咎められ、禁を犯したものは林から追い出され、祭祀の参加資格を取り消される。

##### 2. 村落についての禁忌

###### ①労働に関する禁忌

村神祭祀の期間は何人も山に入って地面を掘ったり、田に下って労働したりしてはならない。女性も針仕事などをしてはならない。それを誰かが見つけると、禁を犯した者は一羽の赤い雄鶏と一碗のおこわを出さなければならない。男性の場合は、司祭に村神の林に来てもらい村神に対して頭を下げたてて贖罪をし、同時に村の長老に向かって、自分の間違いを認めなければならない。

###### ②採集についての禁忌

村神祭祀の期間は村の何人も山に行つて木を切ったり薪を取ったりしてはならない。また、山菜取り、豚の餌にする草取り、山で鳥を撃つこと、川で魚を獲ること、野外で鳥や獣の肉を食べることなどをしてはいけない。一旦それらが発覚すると、前述した方法で罰せられる。

###### ③村からの出入りに関する禁忌

村神祭祀の期間は村から出てはいけない。特殊な事情がある者でも、他所の村に泊まってはならず、暗くなる前に自分の村に帰ってこなくてはならない。他所の村の人が許しても許さなくても、前述の方法で罰せられる。

#### ④生活面での禁忌

村神祭祀の期間は、米を搗いたり、衣服を洗ったり、衣服になにか被せたり、外に物を干したりしてはならない。井戸の近くで顔や脚を洗ったり、頭を剃ったりしてはいけない。そうでないと、前述の方法で罰せられる。

### 3. 司祭の禁忌

村神祭祀の期間、司祭に課せられる約束事や禁忌は一般の人よりも更に多い。簡単に説明すると、村神祭祀の期間には司祭は不吉な話をしてはならず、悪い言葉で人を傷つけたり人を叩いたりしてはならない。村の外に出て友人を訪ねたり、赤ん坊を抱いたりしてはならない。特に生後百日に満たない赤ん坊を抱いてはならず、特に子供や赤ん坊の糞や尿を体につけてしまうのは以ての外である。祭祀の前後三ヶ月は妻と同室することも、野外で動物の肉を食べることも禁じられる。また殺していない動物（自然死した）の肉はいつであっても食べてはならない。また、犬の肉、馬肉、ドジョウ、タウナギなどは食べてはならない。祭祀の後三ヶ月は、他人の婚礼や葬儀に参加してはならない。

\* 本稿の訳注は直接本人に確認しながら付けたものである。(稲村務訳 琉球大学助教授)

#### 新刊紹介

川野 明正 著

### 『中国の〈憑き物〉——華南地方の蠱毒と呪術的伝承』

日本国内における憑き物研究として知られているのは石塚尊俊『日本の憑きもの—俗信は今も生きている』（未来社 1972）や小松和彦『憑霊信仰論—妖怪研究の試み』（講談社学術文庫 1992）などが有名なところであるが、中国の民間信仰における蠱毒などの呪術的伝承を取り上げたものは意外に少ない。

本書は1章から8章に構成されており、1章の序論では蠱毒や運搬霊に関する基礎的な知識や西欧、中国、日本における蠱毒についての先行研究が述べられており、入門書としても読みやすいものである。筆者は中国華南地方の少数民族に伝わる呪術的

伝承をフィールドワークを通じて入念に浮かび上がらせる。本書は呪術的伝承の構造を解明するような内容ではないが、挙げられている事例や信仰形態だけでも十分魅力的なものである。

本書が取り上げた中国の呪術的伝承は日本の憑き物研究において非常に興味深い比較対象となる。そして、そこに見出せる共通性、差異は両民族の心象を映し出す。中国、日本の憑き物研究に大きく貢献する一冊であるといえる。筆者の今後の活躍に期待したい。

(三村宜敬)

2005年10月刊 風響社